

1950年代以降のシャンソン史考察

— 移民歌手が象徴した時代背景と若者たちの家族観の変化について —

日時： 2018年 1月15日(月) 17:00～18:30

場所： 神戸大学 国際文化学研究所 E410 (学術交流ルーム)

講師： 正木 裕子 (声楽家、在ブリュッセル)

司会： 岩本 和子 (神戸大学国際文化学研究所)

講演内容：

フランスやベルギーで広く大衆に受け入れられてきたシャンソンに注目し、歌詞に現れた各時代の家族観、社会観の変遷を辿る。そこには一般的な理想の家族や社会でのあり方についてのメッセージがしばしば象徴的に込められている。また1960年代頃からは外国人や移民二世の歌手たちの活躍も顕著である。家族形態や青少年の社会観を反映する、1950年代からほぼ10年ごとの各時代を代表するシャンソンを対象に、鑑賞と詞の分析をおこなう。シャルル・トレネ「カナダ旅行」、エンリコ・マシアス「君たちは太陽さ」(アルジェリア移民)、パトリック・ブリュエル「子どもたちの権利」、ストロマエ「パパウテ (パパ、どこ?)」(父がルワンダ人、母がベルギー人)などを取り上げる。異文化の共存する国の歴史的背景を具体的に理解しつつ、音楽を媒体として家族のつながりをどう深めるかも考えたい。

また、歌い手としての講演者は、家庭において幼児期に親子や祖父母などの歌唱体験が家族の絆を深める上で極めて重要だと考えている。保護者が自分の声で歌を歌ってやることは子どもにとって代えがたい心の滋養になるはずである。そのきっかけの一つとして、童謡や音楽ものがたりの公演を身近な場所で気軽に聴いてもらうために、「北風に会いに行った少年」その他の幼児、児童向けの公演を2006年から創作している。神戸大学「あーち」での公演を翌日に控え、合わせてその内容と経緯も説明する。

講師略歴：

東京藝術大学、同大学院オペラ科修了。在学中読売新人演奏会、「コシファントウッテ」(デスピーナ)、メサイヤ、第九のソロ出演。国際ロータリー財団、及びベルギー政府給費生としてベルギー王立ブリュッセル音楽院修了、同院声楽科講師をつとめた。

フランス、マルマンドコンクール1位、ベルギー、ヴェルヴィエ国際オペラコンクール2位入賞。中村浩子、エリーアメリック、ダニエルフェッロに師事。ベルギー王立モネ劇場にて、Pヘレウェッヘ指揮Pデュサパン作曲「メデアマテリアル」初演、ベルギー、オーデルゲーム劇場オペラ「真珠とり」「ミレイユ」ドイツ、リップシュタット劇場にて「ダウス指揮「カルミナピウラーナ」、オランダ、フローニンゲンオペラ「悪魔の香り」初演、同イタリア、ポローニャ公演、フランス、モーブージュ歌劇協会オペレッタ「微笑みの国」に出演。アムステルムコンサートヘボダー小ホールフランス歌曲コンサート、マンハッタン日本文化センター武満ソングコンサート、チュニジア、カルタゴ音楽祭日本歌曲コンサートをはじめ、ルクセンブルク、スペイン、フランス、ベルギー、日本にて各地の演奏会に出演。1996年ナクソスレーベルよりリリースのCD『日本の旋律』は北米、欧州、日本にてロングセラーを続けている。

神戸大学国際文化学部・研究科との共同企画としてのレクチャーコンサート多数あり：「フランドルの光と陰をうたう」(2004.8 神戸市立博物館)「レクチャー&室内オペラ公演 モーツァルト<バ스티アンとバスティエンヌ>」(2006.10 あじさいホール)「神大コミュニティコンサート 音と香りは夕暮れの大きに漂う」(2008.10 灘区民センター)「ベルギー便りコンサート」(2016.7 熊本国際会館ホール)など。講演、研究発表も多数あり：「ブリュッセル芸術サロン<自由美学>とマーテルランクとその周縁(フランス語)」(2014.3ブリュッセル シャルリエ美術館 神戸大学国際文化学部EU文化研修共催)など



共催：ベルギー研究会 Japanese Association of Belgian Studies

問い合わせ先：岩本 和子 iwamotok@kobe-u.ac.jp